

第 2 回世田谷区総合教育会議

日：令和 2 年10月31日（土）

場所：第 1 庁舎 5 階庁議室

午後 2 時48分開会

司会 それでは、定刻になりましたので、少し過ぎておりますけれども、これより令和 2 年度第 2 回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は、会議の進行を担当いたします政策経営部政策企画課長の松本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開催に先立ちまして、保坂区長より御挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いいたします。

保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人でございます。先ほどの教育推進会議に引き続いて、第 2 回世田谷区総合教育会議を始めたいと思います。

先ほどちょっと映像の見にくいところなどがあったことはおわびいたします。

教育推進会議、やはり 1 人 1 台、G I G A スクール構想に乗って、世田谷区でも本格的な I C T 教育、これを子どもたちと先生、家庭の間でどのように使っていくのか、まさに今月から始まるそのいわばスタートラインのところで始めていく議論でございます。

この総合教育会議も、これまで、休憩前の教育推進会議で出された保護者、そして教員、子どもたち、また最後の御講評にもあった I C T 教育の向かっていく大きな方向性、こういったことについて、教育長をはじめ教育委員の皆さんの意見をしっかり交換をする場にしていきたいと思います。

それでは、よろしくお願いいたします。

司会 ありがとうございます。

ここで、本日の会議に参加されております教育委員会の皆様を御紹介させていただきます。

まず、渡部教育長です。

澁澤委員です。

宮田委員です。

亀田委員です。

中村委員です。

参加者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

ここで、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。本日は、前半の教育推進会議と同じく、「これまでの学び、これからの学び～保護者や教員・子どもから捉えた I C T による新しい学び～」をテーマに議論を行います。教育推進会議の内容も踏まえなが

ら、区長と教育委員会の皆様とで意見交換を行っていただき、その後、最後に区長より全体の議論の総括を行っていただく予定でございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速、意見交換に移りたいと思います。

まず、区長にお伺いします。先ほどの教育推進会議では、保護者や地域の方、教員、子どもから捉えたICTによる新しい学びについて、映像も交えながら、現状と貴重な御意見をお伺いすることができました。その内容について、率直にどのように感じられたかお伺いしたいと思います。

保坂区長 先ほどの議論を聞いて、私たちはどうしても学校教育というと、黒板があって、先生がいて、生徒が座って、板書した、先生の書いたものをしっかり写して記憶をしていく、そんなイメージがあります。そういった従来の教室の補助的なツールとしてタブレットが入ってくるよという考え方もあると思います。ただ、最後の鈴木先生の総括のように、ICTで学びを救うというキャッチフレーズが出てきました。従来の一斉授業では、なかなか学びを共にすることができない、あるこだわりを持っているお子さん、あるいはそもそもちょっとスタートが遅れてしまっている。実は私、昨日、世田谷区立三宿中学校の夜間学級に行っていました。大体3人から4人の日本人だったり、海外からのそれぞれの国も違う、アフリカからとか、ネパールからとか、そういった若者たちが、日本語がゼロの段階から学んでいる様子を拝見しました。やはり教育の原点というのは、子どもたち同士のやり取り、そして学校の先生と子どもたちのお互いの触れ合い、こういうところにあるなという思いを強くして見て帰ってまいりました。

子どもたちをICTがどのようにこの学びを救っていくのか、ここは個別最適化というところで、後ほどその分野に詳しい亀田委員にもぜひ聞いてみたいところなんです。ICTを使って、タブレットを使って、だから可能になったと、そういう教育の領域が、恐らくこれから可能性として開けてくるんじゃないかと。今、スタートラインですから、世田谷区は大きいですから、一旦列車が走り出すとなかなか軌道修正も大変なんです。なので、スタートラインのところで、このタブレット、もう少し位置づけをしっかりと、新たな教育の地平、これまでになかった個別最適化ということの可能性が見えてきたら、大変いいのではないかとこのように感じました。

司会 ありがとうございます。

続きまして、教育委員の皆様にもお話をお伺いいたします。先ほど、保護者、教員、子

どもの目線に立ったICT教育について様々な声などを聞いてまいりました。その内容を踏まえましてお伺いしたいと思います。

まず、宮田委員にお伺いいたします。宮田委員は、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長の経験などもございますが、教育推進会議で出た御意見等についてどのように捉えていましたでしょうか、お伺いしたいと思います。

宮田委員 宮田でございます。よろしくお伺いいたします。

先ほどの教育推進会議の中で、それぞれいろいろな立場の皆様から貴重な御意見を伺え、とても貴重な時間となりました。その中でも、保護者として日頃不安に思っていること等、率直な御意見もお伺いすることができました。

教育推進会議の中でもありましたが、子どもの教育については、私も保護者の一人ですが、学校と保護者、それから区のほうとつながる、行政とつながる、そういうことがとても大切だということをPTA活動等を通して、日頃から感じておりました。そんな中で、おやまちプロジェクトというプロジェクトのお話を伺って、学校、家庭、地域がまさにつながるともすばらしいプロジェクトだと思っております。今後もどのようにこのプロジェクトが発展していくのか、学ばせていただきたいと思っております。

また、保護者から御意見があった中で、ICT活用ということで、タブレットを1人1台ずつ端末が整備されることで、それを例えば持ち帰ったりする中での不安というのは、私も保護者の方からお話を伺ったりすることがあります。それに対しては、区のほうでもいろいろとルールづくり等を学校と進めていくことにはなりますが、世田谷区では、ICT機器を活用して、家庭ではどのような学びができるのか、そして学校ではどのような学びが行われるのかを、学校、家庭との連携、こちらもどのようになるのかということ、その都度丁寧な説明を保護者のほうにさせていただけたらと思っております。

司会 ありがとうございます。保護者の視点から学校、それから家庭との連携についてのお話をいただきました。

続きまして、中村委員へお伺いいたします。教員としてまさに学校現場に立たれていた中村委員ですけれども、教育推進会議では学校現場でのお話もありましたが、率直な御感想をお伺いできればと思っております。

中村委員 中村です。よろしくお伺いいたします。

私は、今日、最初の渡部さんのお話、ルールやカルチャーを変えるというところに大変印象深く聞いておりました。私自身、学校を離れ、今民間に勤務しておりますけれども、

学校の電話文化からメール文化の職場に行ったときに非常に違和感を覚えております。学校というところはいろいろなことがフェース・ツー・フェースで行われる場所でした。ところが、もう今は、役所もそうでしょうけれども、民間ですと、2メートル先の人間とメールで連絡するようなことが当たり前の状況になっている。メールというのは確かに便利で、言った、言わないということがないように記録として残りますから、非常に優れたツールなのですが、世の中全体でそういう動きになっていて、やがてそういうところに子どもたちは行くわけですから、学校のほうも少し考えを変えなきゃいけないのかなという部分があると思います。

ましてや、最初、私どもがいた頃は、ICTはまず実物投影機で、大きく物を映すところから始めてくださいというようなのんびりした話だったんですが、このコロナ禍で、かなりスピードアップしなければならないという今状況だと思います。授業でまずICTを、実物投影機だけでなく、それこそオンライン、オンデマンド、いろんなものを活用して授業をしなければならない。ましてやこれからタブレットですから。そのタブレットに期待されているのは、単に授業で使うだけでなく、先ほど保護者のお話にもありましたが、学校との連絡ツールとして、それこそ先ほどのメールではないですが、今まで欠席とか何かといえば電話、またはペーパーに、それこそ今話題の印鑑を押して提出するようなものが多かった学校の文化を、このタブレットの連絡ツールによって、やはり変える必要が今後出てくるんじゃないかと思われまます。

そしてもう一つ、おやまちのプロジェクトのお話にもありましたけれども、やはり不登校や特別支援等、課題を抱えるお子様に対して学びを止めないためのツールとしても、このICT活用が今後大きく期待されています。そういった意味で、学校のほうも、このICTに積極的に取り組んでいかなければならないと痛感いたしました。

司会 ありがとうございます。先生の立場から学校の文化を変える、学びを変えろというような、そういったお話をいただきました。

続きまして、澁澤委員へお伺いいたします。澁澤委員は、大学との関わり、様々な企業にも関わりをお持ちですが、先ほど教育推進会議でも児童生徒からの生の声をお聞きになり、どのように感じられましたでしょうか、お伺いしたいと思います。

澁澤委員 最初に皆さんの話を伺っていて、今から1年前の教育推進会議あたりだと、このICT化の問題をどう進めるか、ネットリテラシーの問題ですとか、あるいはブルーライトによる子どもたちの目の負担の問題ですとか、その段階で1年前は論議されていた

というふうに記憶しています。それが僅か、このコロナ禍のために、もう1年たって、今回はもう既にICTありきで、それをどううまく活用していくか、今までできなかった分野ですとか、あるいはICTを利用することによって子どもたちの能力を伸ばしていく、あるいは学力を伸ばしていくということに今後、どうやってうまく活用できるかという議論が中心になっていて、本当に僅か1年で隔世の感を持ちました。

これからどうなるかということなのですが、今度は多分、ICTでさらにその子どもたちの能力を掘り起こしていくというような、その可能性を見つけていく方向と同時に、ICTでは絶対できない教育というもの、つまりICTでできることとできないことというものを分けて、その両方の分野をどういうふうにマッチングさせながら、あるいはどういうふうにいるんな要素を取り込みながら教育をつくっていけるかというその段階に、多分これから1年は入っていくんだろうなと思っております。

例えば子どもたちの社会性の問題、これは先ほどのおやまちプロジェクトの中にも出てきましたけれども、やっぱりネットで分割されたZoomのコミュニティーと、それから後ろからも、横からも、前からも声がかかってくるという社会、その町の雰囲気をも自分の肌で感じていくというものとは明らかに違うわけですし、例えば私の関係している自然環境の問題でも、黒板から伝わってくる自然環境の知識と、森の中に入って360度全てからいろいろ匂いも来る、風も来る、そしていろいろな植物、動物、それが混じり合ったものの中で自然環境を考えていくということが明らかに違う。つまり、フィールドワークですとか、あるいは対面ですとか、要するに私たちがICTと組み合わせるどれがベストマッチであり、またどういう形のその授業を組み立てていけるかということを実際に考えなきゃいけないなと思っています。

私もやはり前回の総合教育会議でもお話ししましたがけれども、半年間大学のオンライン授業をやってきて、本当にびっくりするぐらい、私の言ったことが正確に、それから誰にも満遍なく、そして学生さんにとっては、自分のペースに合わせて講師の言ったことを理解することが可能になりました。今まで座学でやっていた授業に比べたら、学生の理解度は格段に進歩しました。

それと同時に、学生のほうからも、チャットですとか、あるいはリアクションペーパーというようなネット上のコメントがオンタイムで返ってきます。それも、僅か10分ぐらいの差で返ってくる。そしてそれに対してこちらもまた返していかなきゃいけない。先ほど先生の中で池之上小学校の先生ですが、情報がばっと集まってきて、その処理がとても

大変だというお話をされましたが、多分教員にこれから求められるスキルは、正確に伝わるがゆえに、瞬時に返ってきたものに対して瞬時にまた情報を投げかけてあげる。そうしないと、タブレットの中の学生はとても孤独です。ですから、自分が発した質問に対して、すぐ答えが返ってこないということにとっても不安になっていきます。

ですから、本当にこのICTが物すごく私たちの状況を広げたことも事実だし、それから新たな全く違う課題が生まれたのも事実だということに気づいてきたというのがちょうど今の段階だというふうに思っています。

そして、これからできること、できないこと、先ほど言ったマッチング、それを考えていって、初めてこの1年ぐらいして、世田谷でICTを学校教育の中に取り入れた最もいい新しい授業の形、あるいは新しい学校の形、そういうようなものを模索していく時間がいよいよ始まったなということ強く印象を受けて聞かせていただきました。

司会 ありがとうございます。この1年間の変化ですとか、ICTでできること、できないことのマッチングなどについてお話を伺いました。

続きまして、亀田委員へお伺いいたします。亀田委員は、これまでの行政経験や不登校支援の御経験からどのようにお考えでしょうか、お伺いしたいと思います。

亀田委員 ありがとうございます。亀田です。

第1部のお話を伺っていて6点考えたことをお話ししたいと思います。

1点目は、保護者の渡部さんからもお話があった新しいことにチャレンジをする、トライ・アンド・エラーで成長する、そしてエラーを受け入れるというお話がありまして、鈴木先生からもそうしたお話、また保護者の高野さんからも、チャレンジできる環境というお話がありました。この点、私が思いますのは、お子さんにもチャレンジしてほしいし、そして学校の先生方にもチャレンジをしてほしい、さらに言えば、教育委員会を含め、行政としてもチャレンジしていきたいということを思っております。区長からもお話がありましたように、この会議自体新しい取組ということで、チャレンジしているということはとてもよいことかなと思っています。

2点目は、高野さんからお話があった多様な居場所ということですが、学校にいながら別の教室でクラスの授業を受けられるようにしてほしいというお話がありました。これは今現在、例えば福岡市でも、校内にステップルームという別の部屋を設けて、授業をオンラインで配信をして、クラスの授業を別の教室で見ることができるといことが取り組まれています。また、世田谷でも区内の中学校では、現時点では校内に別室を用意して、お子

さんが個別で学習ができるということに取り組んでいる中学校もありますので、今後、自分のいるクラスの授業をオンラインで見ることができるようになるということも多分可能になっていくのではないかなと思います。

3点目は、高野さんから楽しくしてほしいというお話がありました。ICTを活用することによって、学習を楽しくすることができるのではないかというお話がありました。これは平床さんから、家で楽しく学ぶことができたというお話もありました。やはりこの楽しいということは、学校教育にとってとても大事なことだと思いますので、ICTを活用することによって、より楽しく学ぶことができるようになったと、お子さんたちに言ってほしいなと思っています。

4点目ですけれども、平床さんから、ICT活用によって、一人一人のお子さんに寄り添うことができるようになってほしいというお話がありました。これは、私もICT活用によって、授業の在り方、あるいは学校教育の在り方そのものを転換できるきっかけにすることができるのではないかと考えておりますので、この点は次のプレゼンの際にもお話ししたいと思います。

そして5点目ですけれども、お子さんからの意見、声として、例えば言いにくいことも言いやすくなったとか、ほかのお子さんとは共有できるようになったということが、小学校のお子さんも、中学校のお子さんも、ほかのお子さんや先生と共有することができるようになったという声があったことが印象的でした。一方で、操作に慣れていないとか、あと文字情報だけでやり取りすることの難しさという声もあったかと思います。学校での実践も拝見しまして、今は試行錯誤しながら取り組んでいる様子だということをお話することができたと思います。この点、最初はなかなかうまくいかなくても、何とか使いこなそうというその努力が大事だということを今回、第1部を拝見しながら学ぶことができたと思っております。

司会 ありがとうございます。教育推進会議での発言などからポイントのところをお話しいただきました。

続きまして、教育長にお伺いしたいと思います。今、区長や教育委員の皆様からお話をいただきましたが、今後、教育総合センターの開設など、世田谷の教育の変革に対して、どのような展望を持って臨まれるお考えであるか、お伺いしたいと思います。

渡部教育長 私は、皆さんのお話を伺っていて、ちょっと教育の究極の目的は何なのかと、少し大きいところで考えてみました。私たちの使命は、子どもたちを社会で活躍でき

る人に育てるというところにあると思っています。これから出会うであろう困難な問題に出会ったときに、子どもたちが、それはやったことがないからできませんといって挫折をするのではなくて、どうやったら解決できるかと自分で考えて取り組んで、困難な状況乗り越えるような子どもに育ててほしいということです。それは、今までのことを考えると、これから新しい時代を迎えるわけですから、回答もないし、やったこともないということがほとんどになると私は思います。そこで考えてみると、大人はそういう課題に出会ったときには、情報を収集して、とにかく多くの情報を収集して、得られた情報を整理して、そしてそれが適切かどうかを判断して活用していくと思います。そのときに大人であれば、その情報の信憑性というのをとても大事にすると思います。これが情報活用能力だというふうに思っています。

そこで、一人一人、1人1台のタブレットが子どもの手に渡ると、これと同じことを子どもたちがやるということになると思うんですね。ということは、学習課題をもらったときに、どうやってそれを回答しようかというときに、タブレットを使って調べるのか、またはインターネットにつないで調べるのか、そういうことを子どもが自分の力で考えていくということになると思います。そしてまた、これはタブレットじゃなくて、辞典で調べたほうが早いとか、友達に聞いたほうが早いとか、これは大人に聞いたほうが早いとか、子どもたち自身がこれはICTを使う場ではないというところを、子どもがまた理解していくということも必要になるというふうに思っています。

今までの教育の中では、それをこっちがICTを与えていて、さあ、これで調べなさいという教育だったと思うんです。でも、これからは、子どもはいつもICTを、タブレットを自分の手元に持っているわけですから、今これを使うのか、これを使わないのかということも子ども自身が判断していくことが必要になるということです。もちろん、その信憑性というか、正しい情報かどうかというのを子ども自身が理解する力も必要になるというふうに思っています。だから、これからは、こっちがお仕着せの教育ではなく、子ども自身がそれをどう選んでいくかという教育になるというふうに思っています。

そういうふうに変えていくには、私は先ほどの鈴木先生の話聞いていて、これは1回は死の谷を越える覚悟が必要なんだな、1回は死の谷に落ちるんだなということをととても感じました。私たちは、ステップで、これは必ずどの学校もやってくださいということを示そうと思っていますが、やはりそれがなかなか浸透するまでには時間がかかるということも思いました。でも、死の谷で埋没していないで、必ず立ち上がって、そして今までの

ところを超えるぐらいのことになるようなことをやっていかなければいけないというふうに思っています。それにはやはり教員の意識改革がとても大事だというふうに思っていますので、そういうふうな形で進めていければいいなというふうに思っています。

司会 ありがとうございます。社会で活躍、行動ができる人に育てるという究極の目的、それから、これから死の谷を越える覚悟、そういったためには、教員の意識改革、そういうお話をいただきました。

それでは、教育委員会の皆様から様々な御意見をいただきましたけれども、ICTを活用した学習環境の変化のさなかで、教育委員会はハード、ソフトの両面から子どもたちの学習支援に臨まなくてはなりません。ICTを活用するメリットのうち、特に一人一人に個別最適化された学びや、双方向型のやり取りの活性化が期待され、これからは、これからの特別支援教育の在り方や不登校支援にも大きな影響をもたらすことが考えられます。

そこで、亀田委員に、特別支援教育、それから不登校支援のこの間の動向と世田谷区での活用の方向性について、改めて御報告をいただきたいと思います。それでは、亀田委員、よろしくお願いします。

(スクリーン使用)

亀田委員 ありがとうございます。資料を共有いたします。

私からは、特別支援教育、あるいは不登校支援とICT活用というテーマで、簡単に10分ほどこれからの方向性をお話しし、課題の提起をしたいと思います。このタイトルを「それぞれ、みんな」としたのは、それぞれのお子さんごとに別々の対応をすることで、それによって結果としては、みんなで共に学ぶことができるという意味で、こういうタイトルにしました。この点は最後のまとめでもう一度お話ししたいと思います。ちなみにこれはUDフォントを使っております。

ICTの活用に関して3つの観点で考えたらよいかと思いました。この写真は祖師谷小学校で、それぞれのお子さんの画面を大型画面で共有しているところです。この上の部分の「お子さんの〇〇」の部分、1つ目が情報を保障する。お子さんが情報を入手したり、発信したりするためにICTを活用するということです。2つ目が、機会を保障、学校に来られなくても、自宅や学校以外の場で同じように学習することができる。3つ目が、学力を保障するためにICTを活用するということです。

では、この3つはどういうことか見てみたいと思います。情報の保障に関して、これは国の研究所の事例です。難聴のために正確な言葉を聞き取ることが難しいお子さんが、夕

タブレットの筆談アプリを使って正しい言葉の確認をする、あるいはお子さんの発言が聞き取りにくい場合には、教師が筆談アプリを使って確認するというものです。あと写真にはないんですけども、区内でも桜小のすまいるルームの先生から教えていただいたのは、読み書き支援ソフトを使っていらっしゃるようでして、画面をタップすると次の言葉が出てきて、順に読んでいくことができるようにしたり、文字をタブレットで拡大しながら読んだりしているなど、区内でも既に様々にICTが使われています。

そして、これは交流学习において特別支援学級に在籍するお子さん、恐らくこの一番手前の右側の黒い服のお子さんなんですけれども、通常の学級で授業を受けるときに、特別支援学級の担任の先生が教室の前方に座っている、これは非常に見にくいんですけども、図5のすぐ左のところに、多分パソコンの画面、パソコンの後ろが映っているんですけども、ここに先生が座っていて、要約筆記用のソフトというのをを使って、担任の先生の話とか、ほかのお子さんが発言した声をキーボードで入力すると、このお子さんの画面、机に置かれたタブレットに入力した文字が表示されるという事例です。このように、読み書きが苦手とか、あるいは聞くこと、見るのが難しい子さんにとって、ICTを活用することでその困難さを軽減することができるという例です。

読み書きが苦手とか、見るとき、コミュニケーションするときにタブレットを使いたいというお子さんは実は多いのではないかと思います。今後、1人1台になったときには、お子さんの学習をサポートすることができると思うのですが、その際気をつけたいというか、事務局におかれてもお考えいただきたい点があります。

先日、ある保護者の方から伺ったのですが、お子さんが先生の話聞き取るのが難しいと、あるいは文字情報のほうが入りやすい、そして書くのが苦手なお子さんなんだそうです。そこで、御家庭のタブレットを学校に持って行って、黒板の文字をタブレットのカメラで撮りたいということで、担任の先生に御相談した。担任の先生がおっしゃるのは、タブレットを持ってくるのはオーケー、ただ、担任として1人のお子さんだけを見るわけにはいけないので、タブレットの使用をサポートすることはできないというお話でした。確かに一回一回サポートするのは難しいと思います。一方で、御家庭としては、タブレットをお子さんに持たせるまでにはいいんですけども、では、授業の中でどう使えばお子さんが適切に情報を入手できるか、そこまでは御家庭ではよく分からないし、お子さんもタブレットを持たされたのはいいんですけども、何をどうしたらいいか分からないという現実もあると思います。そこで、見ること、聞くこと、読み書きがやりやすいようにタブレット

を使うには、担任の先生、あるいは御家庭はこうした点に気をつけるとよいみたいなガイドラインとか、校内研修といった配慮があるとよいのではないかと考えています。

次は、特に不登校のお子さんに関して教育の機会の保障という点です。今年度前半、新型コロナ対応で学校が臨時休業になったときには、世田谷区としても動画の配信、共有ソフトの活用などによって、家庭にいるお子さんにどうやって教育を提供するかという工夫をしてきたところです。私が訪問した幾つかの学校では、学校が再開している現在も学校を休むお子さんがいた場合に、教室の黒板の前にパソコンを置いて、カメラで授業の様子を家庭に配信しているという例がありました。特に不登校のお子さんにとっては、オンライン教育を進める必要性が高いと考えます。

ここで、全国のデータを見てみたいと思います。先週公表された文部科学省のデータによると、不登校の小中学生は全国で18万人、これは年々増加をしています。不登校に関しては、ほっとスクールなど学校外で学んだ場合に、学校の出席扱いになるという仕組みがあります。さらに、自宅でICTを活用して学んだ場合にも、校長先生が認めれば出席扱いになるという仕組みがあります。しかしながら、このICT活用で出席扱いになったおひさんは全国で僅か608人しかいません。さらに言うと、出席扱いに加えて、成績評価を行っている学校は全国にもほとんどないのではないかと考えています。

そこで、世田谷区では、これは世田谷区の方針ということなんですけれども、全国に先駆けて、ICTを活用した場合に、出席扱いとともに、成績評価もしていこうという方針を掲げています。具体的にどう進めるかは現在事務局のほうで御検討いただいているものと思いますので、ここでさらに言えば、中学生となっていますけれども、小学生も含めて、ICT活用の出席扱いと、成績評価を進めていければと考えています。不登校の場合も、成績がつくことで、進学の際に少しでもプラスになるのではないかと考えているところです。

最後は、学力の保障です。この写真は、ほっとスクール希望丘で、二、三週間前から使い始めたAIを使った算数、数学の教材です。ちょっとモザイクをかけているので、見えにくくてすみません。経済産業省と連携をしてAI教材を導入しています。スタッフの方に伺ったところ、お子さんのペースでどんどん進める。1日で100問解いたお子さんもいるというお話でした。1日100問てきっとすごいんだろうなと思っています。また、算数のつまづきや苦手がクリアできるとか、不登校で習っていなかった内容でも問題を解ける手応えがあるとおっしゃっていました。スタッフの方としてこの教材を使えるのがありがたいと

もおっしゃっていました。

こうしたICTコンテンツを活用した個別最適な学びについては、国としても推進していこうということで、これは今月、中央教育審議会が公表した中間まとめでは、一人一人のお子さんの学習計画を作成する。そして計画に基づいた学習を行い、さらにその学習結果としての学習履歴の分析によって、学びのPDCAサイクルを回していくとされています。

お子さんの個別の計画は、現時点ではすまいるルームや特別支援学級に在籍するお子さんについてのみ個別の計画を作成しているところです。今後、個別最適な学びを進めるに当たっては、障害のあるなしにかかわらず、全てのお子さん一人一人の学習計画を考えていこうという提言です。

ちなみに話はちょっとそれますがけれども、今、学習履歴とありましたけれども、その学習履歴のデータを活用するために、「学習指導要領のコード化」というのが、先日、文部科学省から公表されました。指導要領の1行1行について16桁の番号を振っていきまして、例えば小学校国語の話し言葉と書き言葉との違いに気づくことという内容は、82102D3112000・・・というコードになっています。この指導要領のコード化によって、例えばお子さんの学習履歴もそうですし、さらには教員の指導用資料とか、教員研修が指導要領のどの部分に該当するかなどの教育データを全国共通で分類、蓄積できるなどが今、想定されています。

話を元に戻しますと、世田谷区でも冒頭の教育長のお話にもありましたように、個別最適化学習を導入するとしています。ICTコンテンツを活用した学習は、先ほどのほっとスクールの話のように、お子さんが主体となってどんどん進めることができると思います。大事なことは、ICTを使った個別最適な学びを授業の中で行うことと考えます。従来ですと、ICTを使った個別的な学習は、家庭学習を想定して、授業は従来どおりというケースが多かったと思います。しかしながら、1人1台を学校に置くわけですから、授業の中でICTを使って個別最適な学習を行う、実はこれによって授業というもの、あるいは授業における指導方法が大きく変わって、先ほどのお話にもありました、教師主導からお子さん主体の教育へと転換する、その大きなきっかけにすることができると期待をしています。そして、お子さん主体の教育に転換することで、障害があるかないか、あるいは不登校かどうかと関係なく、一人一人に合った学習が可能になると考えます。ただ、一方では、こうした学び方が合わない子さんもいると思いますし、全てがICTを使った個別学

習になるわけではないので、状況に応じて学び方を選べたり、集団での学習と組み合わせたりすることがよいのではないかと思います。

そこで、私からのお話のまとめとして、1人1台となってICTの活用がこれまでに比べて格段に進むようになることによって、障害のあるなし、不登校かどうかにかかわらず、全てのお子さんが一人一人に最適な学びを選ぶことができるようになる、そうした教育環境を提供するのが私たちの役割ではないかと考えます。多様な選択肢を提供できる教育へと転換していくことが、これからの社会における教育の進むべき方向性であろうと考えます。

以上です。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。障害のあるなし、また不登校に関わる全てのお子さんが最適な学びをというふうな1人1台による可能性についてお話をいただきました。

それでは、再度区長へお伺いしたいと思います。1人1台端末のほか、教育総合センター内のほっとスクール城山の開設や、分教室型不登校特例校の整備など、世田谷の教育はこれから大きな節目を迎えております。亀田委員のお話も受けまして、教育委員会と予算編成、執行の権限を持つ市長部局とが、どのように連携し、世田谷の教育を支援していくべきであるか、お考えをお伺いしたいと思います。

保坂区長 亀田委員のお話を聞きながら、やはりこういった一人一人に即した、例えばAIがつまずきのポイントをチェックしながら支援するとか、こういうことは、まず以前なら、マンツーマンで個別指導教育ですか、そういうことじゃないとできなかったんだと思います。

今同時に思い出していたのは、たしか8年ほど前に自然エネルギーの大変盛んなデンマークのロラン島という島なんです。そこで小学校の授業を見せてもらったときに、日本の教室にある黒板より少し大きめのスマートボードという電子黒板です。これが入っていて、そこから動画は出るわ、いろんな形でいわゆるタッチパネル方式になっていますので、そういうものを使いながら授業をしていたのを思い出しました。デンマークでは、全ての学校にその当時、入っていたんです。

それから、中村教育委員、そのときは校長先生でしたが、一緒にオランダに行ったときに、やっぱり特別支援教育でタブレットを使いながら教えている姿も見ましたし、また、イエナプランスクール、これは一人一人プログラムが違うという画期的というか、オルタナティブ教育の一つなんです。その教室を見せてもらったときに、これは調べ学習、ネ

ルソン・マンデラの記事を検索している子どもの話を聞いたら、これを調べてずっとやっているんだと、そしてプレゼンテーションするのが私の目標なんだというようなことが起きていました。

つまりは、私たちは、私自身も含めて、日本の教育、あるいは日本の社会というのは、60年代の高度経済成長、そしてアメリカに次ぐ第2の経済大国、つまり大変優れた社会、あるいは経済をつくってきた。それは成功体験として物すごくあるんです。ですから、高度経済成長時代の基礎は、やはり優秀な教育にあったと。その日本の教育が世界一だと、こういった思いも、学校関係者の方はお持ちの方もいらっしゃると思います。ただ、世界を見渡してみると、今、この同じコロナで、みんなこういったネット学習、あるいは配信、世界中の全ての国がやっているわけで、私は恐ろしいほどの速さで教育プログラム、いわゆる学び、伝え、教え、そして子どもたちがまた反芻してさらに深めていく、こういうプログラムが世界中で恐ろしい速さでやっぱり今進歩しているというふうに思います。どう進歩しているのかはぜひ専門家に聞きたいところではあります。

恐らくこれからの世田谷区の教育というのは、やはり世界のトップレベルの、トップレベルといっても、別にいわゆる英才教育という意味ではなくて、本当にきめ細かい一人一人をしっかりと見た教育です。これを世界各国でやろうとしている、そういう情報にもちゃんとアンテナを立てる教育総合センター、そしてやはり情報は次々と入ってきますから、学校の先生は忙しいし、そんな情報を全部チェックすることはできません。中にはされている方はぜひ出していただきたいんですが、そういうふうに世界の教育改革とつながる世田谷からのタブレットを、あるいはICTを契機にした学びの改革というものが、いよいよ始められるスタートラインに来たなど、そんな思いで聞いておりました。

司会 ありがとうございます。

それでは、教育委員の皆様の方にお伺いしたいと思います。

まず宮田委員へお伺いします。これまでのお話を踏まえまして、保護者の立場から、今後の世田谷のICT教育をどう進めていくべきとお考えでしょうか、お伺いしたいと思います。

宮田委員 私たち教育委員は、区立幼稚園や小中学校の授業等を拝見させていただく機会がございます。その中で3点ほどの観点から発言させていただきます。

まず1つは、子どもの自ら学ぶ力を育てるということで、実際に児童生徒がタブレット端末を活用して、教科書、資料のほかにインターネットで調べ、ワークシートをタブレッ

トの端末のカメラで児童が撮影して、先生の指定した端末のボックス　これはたしか口イロノートだったと思いますが、　に送信して、全員送信が終わると、各自の意見や考えを即時に共有しながら授業を進めていました。児童はふだんから端末操作に慣れているということで、各クラスで端末を使用している学校でございました。自分の考えを表現できる場があるということで、より主体的に学習に取り組む姿勢を見ることができました。子どもたちが自ら学習課題に取り組み、自分の調べたことや考えを表現でき、そこから新たな学習課題へとつながっていく授業が展開されるようになっていったと思います。

また、先日伺った小学校では、諸事情で登校できない児童がクラスの授業を受けられるように双方向のオンライン授業、同じクラスのみならず同じ授業を受けられるようになっていました。既に長期学校休暇中に各校の先生方の御尽力で、動画等のツール配信を行ってくださっています。今後、児童生徒一人一人に、端末が整備されるということで、先生方で議論しながら、ICTを活用した授業づくり、また日常的にICTを活用できる体制づくりを事前につくっていくことが必要だと感じました。

2つ目は、ICT活用による家庭学習支援ということです。個々の習熟度に応じた学習が家庭でも可能になるということになりましたら、子どもの基礎学力の定着にもつながります。私自身、子どもが小学校の低学年の頃に、算数の問題を解いていたときに、子どもが分からないというので、どこが分からないのか聞いてみると、全部と言うんです。本人もどこが分からないのか分からないという状況がございました。そのときは、問題の意味は分かる？というところから始まりまして、この後、問題を解くまでに延々と続いていくわけです。AIを活用して、子ども自身が分からない問題をつまづいた箇所から繰り返し解いていく中で、分からないまま学びが進んでいく状況をつくらないようにするということはとても大切だと思いました。

また、学校と家庭をつなぐ学習環境が構築されれば、学校で学習した課題を自宅でも継続して学習できるようになったり、また保護者も、子どもの学校での活動や学習到達度をいつでもチェックできるようになるといったことも可能になると思います。

最後に、オンライン教育の推進ということで、これは前回の総合教育会議のときにも出ましたが、学校を越えた交流ということで、ほかの学校だったり、地域との交流、それから大学、民間企業、専門家、海外との連携でお互いに顔を見ながら、遠隔で、多様な見方や考え方に触れる機会をつくり出すということは、子どもたちにとっても大切なことだと思います。

また、主体的、対話的で深い学びの実現に向けて、教員、児童生徒が学びのツールとしてICTをいつでも活用できるようになることが大切だと感じております。

司会 ありがとうございます。

中村委員にも同様にお伺いしたいと思います。これまでのお話を踏まえまして、学校現場の立場から今後の世田谷のICT教育をどう進めていくべきとお考えでしょうか、お伺いしたいと思います。

中村委員 先生たちがこれからやるべきこととしてというか、身につけるスキルとして、ICTを授業で使う、そして、評価に使う、さらに先ほどもお話しした校内及び保護者との校外との連絡ツールとして使う、それから今までもこれはやっていましたが、公務の書類作成等で使う、そんなようなことがありますけれども、特に授業では、本当は一斉学習に使う、個別学習に使う、共同学習に使うという3つの場面が想定されるんですが、多くの場合、一斉学習での使用が大半で、なかなか3つの場面での使用ということまでは至っていない現実もあります。

そういった意味で、使う子どものスキルもそうですし、使う教員のスキルアップが当然必要ですが、このためにはやはり一定の研修がどうしても必要になってきます。最近読んだ教育記事では、ある学校では打合せをやめて、毎朝5分間ぐらいのプチ研修をやっているなんていう実践発表もありました。確かに今入っている校務支援システムをうまく活用して、多くの連絡をメールや掲示板で済ませて、このICT活用のための研修時間を確保するなどの各学校での工夫も必要ですが、やはり世田谷区としては、文部科学省でICT活用指導力チェックリストというのを既に出していますけれども、場合によってはこれのもうちょっと中身を詰めた世田谷バージョンなどを作ってみる。例えばロイロノートをどの程度活用しているとか、そういう世田谷の実態に即したチェックリストを作って、各校に配付して、教育委員会で実態把握する。それからまたは学校の校長先生が校内の実態を把握するツールとして使い、それで、先ほどお話の出た死の谷を越える工夫というのをぜひ区でも取り組み、各校でも取り組むような、そんなことがこれからICT教育を進める上で必要になってくるんじゃないかとお話を伺って考えておりました。

司会 ありがとうございます。

それでは、澁澤委員にも同様にお伺いしたいと思います。これまでのお話を踏まえまして、今後の社会の在り方を見据え、世田谷のICT教育をどう進めていくべきか、お考えをお伺いしたいと思います。

澁澤委員 もう皆さんおっしゃったことなんですけれども、ICTはやはりツールだと思います。今までよりもはるかに効率的に、また平等に、それから使う側にとっても、それから私たちが伝える教員の側にとっても、非常に優れた当たり前のツールになっていくことは間違いないことなんです。ところが、今まで先生方が授業の中で伝えてきたことは、実は授業の情報だけではないと思います。例えば先生方のお人柄ですとか、あるいはもっと言ってしまうと、愛ですとか、優しさだとか、慈しみだとか、そういうものを別に先生方は意識しないで授業というもののの中で伝えてきた。逆に授業で今まで伝えてきたことは、ある意味で外形化されたものですよね。言葉、言語化され、あるいは映像化されたもの、それはICTがはるかに効率よく、ある意味では圧縮して短い時間に子どもたちに正確に伝えるようになったときに、その取り残された愛だとか、慈しみだとか、あるいは情緒的なものだとか、昔の人が言うならば、物の哀れというような感覚だとか、実は社会の中で生きていくとき、それから私たちがこれから持続可能な社会を実現していくときに、最も重要なのは実はその部分です。それをやっぱり学校という場、あるいはICTも使ったそのネットワーク、地域の中、それから家庭の中でどうやって子どもたちにちゃんと伝えていくか。

やはりさっきも何回も指摘しましたけれども、社会教育ですとか、家庭教育という単なる知識を伝える教育ではない、要するに、教育長がおっしゃった、社会の中で活躍できる人材をつくるのが教育の最終目的、私はそれプラス社会の中で活躍できて、自分を幸せと思える人材をつくることだと思っている。そうすると、幸せにその人たちが生きていくためのとっても重要な要素、それをこれからやっぱりみんなはどう子どもたちに伝えていくかということを改めて考えていかなきゃいけない、あるいは授業の形態と学校の形態として考えていかなきゃいけないというふうに私は感じさせられました。

司会 ありがとうございます。

それでは、教育長にも同様にお伺いしたいと思います。これまでのお話を踏まえまして、今後の世田谷のICT教育をどう進めていくべきとお考えか、お伺いしたいと思います。

渡部教育長 私は、1人1台のタブレットが配備されれば、本当に世田谷の教育の可能性がさらに広がるというふうに考えます。それは、ICTが子どもたちの支援のツールになる、個性に応じた学びのためのツールということです。鈴木先生の言葉をお借りすると、ICTが学びを救うということです。今までの授業では、理解して、記憶して、そしてそれを知識にする。それを効率的にみんなが同じペースで学ぶというのが中心でした。しか

し、これから子どもたちに必要な資質能力はそういうものではないと私は思っています。

子どもたちの中には、ゆっくり学んだり、繰り返し学んだり、それから子どもによって違うところから学びたい、みんなが1から始めても僕はこっちから行きたいよという子もいます。それから好きな場所で学びたいという子もいます。それはどれも間違いではなくて、むしろ学びというのはそうあるべきだと私は思います。

私は誰一人置き去りにしないという言葉を確認に平床さんと一緒のときにお話をしました。GIGAスクールでは誰一人取り残すことのないという言葉を使っています。先ほど説明した中にも入ってきましたが、まさにこのICTは、このようなことが実現できるツールになるのではないかというふうに私は思っています。それには、平床さんがお話しなさっていたように、見た目で子どもを判断しないとか、見た目でそうだろうと思われてしまうとか、本当に根底の考えから変えていく必要もあるんだなというふうに思っています。

いろいろなことを子どもに言うときに、先ほどお話にあった髪の毛の色とかいろいろなものも、駄目だ、駄目だではなくて、なぜそれがそういうふうに思うのかとか、いろんなことをちゃんと子どもに伝えながら、また様々なことの可能性を探っていくということも必要になってくるというふうに思います。

先ほど高野さんの話にあった、学校に行きたい、友達に会いたい、でも、周りが気になって学習に集中できない、その言葉が私はとっても心にしみました。苦しい、子どもが学校にいることが苦しいというのはとても私たちにとっても悲しいことだし、苦しくない、できれば楽しいというところまで引き上げたいというふうに私は思います。

これから1人1台を入れていきます。そのために、この学びを推進していくために、では、何をできればいいのか。今までの話も教員の意識改革というところになってしまいうんですが、意識改革って一体何から始められるのかというところもあります。こういうふうに学びを変えていくときには、私は先生方の支援も必要だというふうに思っています。先生方は、40人もいる中で、ホワイトボードを使ったり、なるべく共同的には学ぼうと、本当に一生懸命いろんなことを考えています。だから、そういうこともありながら、なかなかこういうふうな意識改革もこれから必要になっていくべきですから、どんなことが先生方の支援にできるかなと考えたときに、これから学びは、ゆっくり学ぶ子がいたり、繰り返し学ぶ子がいたり、とても変わってきます。そうすると、やっぱり個別の指導計画というのが必要になってくるんですね。子どもの学びを保障するためには、こういうふうな計画でこの子は学んでいけばこの力が身につくというのにも必要になってきます。

だから、そういうことを支援していったり、それから、これは先生方の働き方改革にもなると私は思っているんですが、学習のログ、学習の履歴をためていく、それが、先生方が丸つけを全部自分でやっているのではなくて、そこにためていったものを見ればできるというふうな、いずれは先生方の働き方改革につながっていくと私は思っています。だから、一旦死の谷に落ちても必ず復活できるということを信じてやっぱりやっていくことだというふうに思っています。

それから、もう一つ皆さん方にお願いは、これから4万9000台のタブレットを入れます。4万9000台もあるわけですから、必ずトラブルは起こります。もう全てがうまく本当に上手に動くということではなくて、やっぱりたくさん故障したりとかということが起こります。地域の方からも、支援をしますよとか、私にできることがあれば言ってくださいというお声もたくさんいただいています。私たちはそういう方たちの支援を受けながら、エラーを受け入れながらやっていくという風土をぜひつくっていきなというふうに思っています。

司会 ありがとうございます。

ほんの少しだけ時間がございますので、もしよろしければ、区長から教育委員の皆さんに確認したいこと、また教育委員の皆さんから区長に確認したいことがあれば、多分1問程度になるかと思えますけれども、御発言があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

では、区長、お願いします。

保坂区長 澁澤委員に、お話の中で、ICT、あるいはタブレットがすぐれて得意とするところと、これはタブレットやICTでは代替できない、やはりリアルに伝えるべきところとお話があったんですね。先ほどちょっとデンマークの話で、日本はかなり遅れを取った的な言い方をしました。もう一つデンマークの学校でびっくりしたのは、図書室が、日本でいえば下駄箱があるような、そこが1階全部図書室で、町の人も自由に入ってくる。すごく図書室に力を入れていました。実は検索すると何でも分かるというふうに今多くの人が、例えば新聞記者の情報発信源の人たちも考えていますが、1995年以前の情報はほとんどないと言ってもいいかな。やはりインターネットが普及してからの集積にすぎない。

それで、ちょっと長くなってしまいましたが、子どもたちはSNS時代を生きるわけです。必ずしも人間は賢くなっていない。好き、嫌いですぐ即断したり、フェイクニュースにも躍らされる面もある。一方で、便利に検索したり調べてというこのICTの機能と、

例えば図書館にみんなで行って、こうやって調べてみようと。この違いというのか、そのあたり、ぜひ図書館、本のおもしろさにもこのICTが入り口になってほしいなと思うんですが、いかがでしょうか。

澁澤委員 先ほどから言ったように、図書館だけではなくて、いろんなそういう入り口をやはり用意してあげる。それが多分今の私たちにとっては入り口と思えない、もう普通にあるものなだけけれども、今後生きる子どもたちにとっては物すごく重要な入り口がたくさんあると思います。それは、1つは商店街かもしれない、1つが図書館かもしれないし、1つは自然の中かもしれないし、いろんな入り口から入っていけるような、つまり、先ほど言った、私たちがこうやって言語や、あるいは映像で確認している、つまりゼロか1かに翻訳できる情報というのは、私たちの脳の中の情報のごく一部でしかないわけです。よく身体性だとか情緒だとか言われている、つまり言葉になっていないけれども、のどまで出かかっているけれども、とても重要だという私たちの感覚、それをどれだけ豊かに育ててあげるかが、子どもたちがやっぱり将来、社会に出たときのすごく重要な能力になってきます。その部分、やっぱり図書館も大変重要な1つのツールだと思いますし、今までのように、単なる図書が並んでいますよ、情報が集積していますよだけではなくて、その図書館に行くという行為で子どもたちに伝えられるもの、それは一体何があるのかということに改めて今、私たちが無意識にやっているものを意識化していくという努力も私たちにとっては必要なのかなと思っています。

司会 ありがとうございます。

お時間が迫ってまいりましたので、意見交換のまとめに入りたいと思っております。

最後に、区長にお伺いいたします。本日の議論で、区長と教育委員会が共有した内容を踏まえまして、予算の編成、執行権を有する区長の立場から、世田谷区が目指すべき教育の将来像と今後の具体的な方向性についてお考えをお伺いしたいと思います。

保坂区長 現在、コロナウイルスが社会に大変大きな影響を与えているという今日であります。世田谷区でもこれからいろいろな財政支出を点検していくという時期に当たりますが、この時期に、国が1人1台というGIGAスクール構想、これだけはまずしっかり実現しようというふうに考えました。つまりは、先が見えない、こういうカオスの時代に、教育、子どもに投資を惜しんではならないというふうに考えています。ですから、今後、ICTを巡って予算が厳しい場面が来るかもしれません。しかし、それは、今小中学生の保護者である皆さんも、子どもたちが卒業してからも、次の世代の子どもたちにきちっと

バトンを渡していけるような予算措置をし続ける自治体ということをご希望いただきたいと思いますし、誇りにしていただきたいというふうに思います。

そして、このICTもある意味で避けては通れないこれからの時代に、さわりにはなかなか難しいツールであります。ただ、これは万能で全てができるということではなくて、濫澤委員がおっしゃったようなできないことも逆にくっきり見えてくるかもしれません。少なくとも世田谷の子どもたちに、情緒的な好き嫌いでイエス、ノーを決めるのではなくて、冷静に奥深く、きちっと事実を見て判断していける力、また、他の方が語りかけている内容についてしっかり正確に聞き取る力、あるいは本であれば読解力、こういったものを身につけて、そして自ら判断する、そして成長する、その一つのツールとして、幾つかのツールの中の一つとしてこのタブレットを学びの中で生かしていただきたいと思っております。

学校の先生方には大変苦勞をかけることと思っております。また、エラーを受け入れるという話がありましたけれども、幾つかのトラブルが起こってくることもあろうかと思っておりますが、またこの起こってきている問題をこの総合教育会議で実際こんなことがあるんだということもしっかり表に出しながら、世田谷の子どもたちの学びをさらに豊かなものにしていくと、改めて後押しをしていきたいと思っております。

司会 ありがとうございます。

お時間となりましたので、最後に、区長より閉会の御挨拶を申し上げます。区長、よろしく申し上げます。

保坂区長 すみません、何度も。今日は1時から教育推進会議、そして今4時ですので、3時間にわたって大変多くの方から多面的に、ICT、タブレットが入ってくる、まさに11月1日、この月から数か月かけて教室に、そして家庭にICT教育が1人1台という時代を迎える画期的な時期のシンポジウム、フォーラムとして大変有意義だったと思っております。

今日の議論を、ただ言葉だけに終わらずに、しっかりと教育委員会のほうで学校現場、子どもたちの下へ届けていただきたいと思います。

今日はありがとうございます。

司会 ありがとうございます。

今回、Zoomを使いました新たな試みとしましてこの会議を進めてまいりましたけれども、区の職員が撮影操作を行っておりまして、見えづらい点ですとか、聞きづらい点などがあったかと思っております。申し訳ございませんでした。行政のICT化も死の谷を乗り越

えていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

以上をもちまして、令和2年度第2回世田谷区総合教育会議を終了させていただきます。
皆様、長時間にわたり御参加、聴衆いただきましてありがとうございました。

午後4時閉会